

2022年度 防災人材交流シンポジウム「つなぎ舎」開催報告

1 開催目的

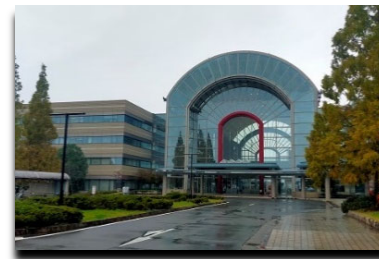
南海トラフ地震等の大規模災害に備えるためには、県民一人ひとりの防災力向上が必要不可欠です。東日本大震災の被災者と将来の被災者である愛知をつなぎ、地域・世代・組織を超えたあらゆる主体が、過去の災害教訓を継承し、我が事として捉え、防災・減災を実践につなげていくことを期待します。

2 日時・天候

2022年11月13日（日）10:00から17:00 雨天

3 場所・内容

あいち健康の森公園 あいち健康プラザ プラザホール
(知多郡東浦町森岡源吾山1-1)



スローガン：「東北から愛知へ、愛知から未来へ」

時間	区分	内容
10:00～11:30	第1部	映画上映会
13:00～13:10	開会	挨拶、開催趣旨
13:10～14:55	第2部	3.11の体験と教訓を未来へ
15:10～17:00	第3部	パネルディスカッション、グループワーク
17:00～	閉会	挨拶



4 主催

防災人材交流シンポジウム実行委員会

名古屋大学、愛知県、名古屋市、認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード、あいち防災リーダー会、特定非営利活動法人あいち防災リーダー育成支援ネット、なごや防災ボラネット、特定非営利活動法人耐震化アドバイザー協議会、あいち・なごや強靱化共創センター

5 共催

公益社団法人3.11メモリアルネットワーク、一般社団法人日本損害保険協会中部支部、中日新聞社

6 開催方法

会場参加、Zoom参加

7 参加者数

会場参加者180名、Zoom参加者40名 計220名
(会場内訳：災害ボラ44名、学生36名、ろうあ者11名、一般来場者40名、その他49名)

8 主な内容

○ コロナ対策

検温・消毒・マスク着用・ソーシャルディスタンス・換気等のコロナ対策を行いながらの開催となりました。



○ 配付、展示等

来場者には、各種パンフレットやノベルティを配付しました。

また、ホワイエ（ロビー）では、主催・共催団体による展示会も開催されました。



○ 運営

シンポジウムの様子は、オンライン(Zoom)配信を行うとともに、ろうあ者の方への手話及び要約筆記も合わせて行いました(第2部、第3部のみ)。



○ 【第1部】映画上映会「たゆたえども沈まず」

あいち防災リーダー育成支援ネットの伊藤善之 理事長が第1部の進行を務めました。東日本大震災からの10年間を描いた記録映画を通じて、被災地の現実とそこで暮らす人々の想いを、来場者と共有しました。



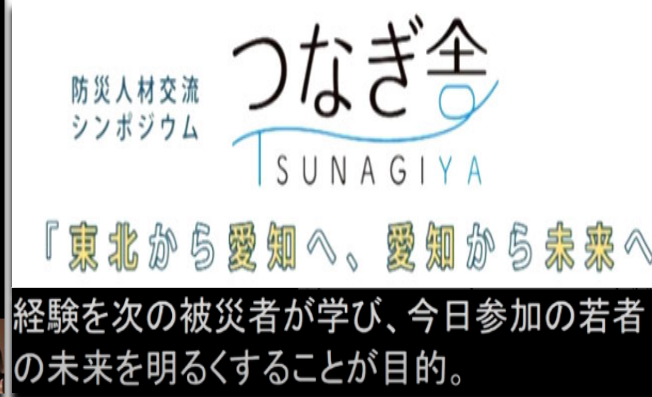
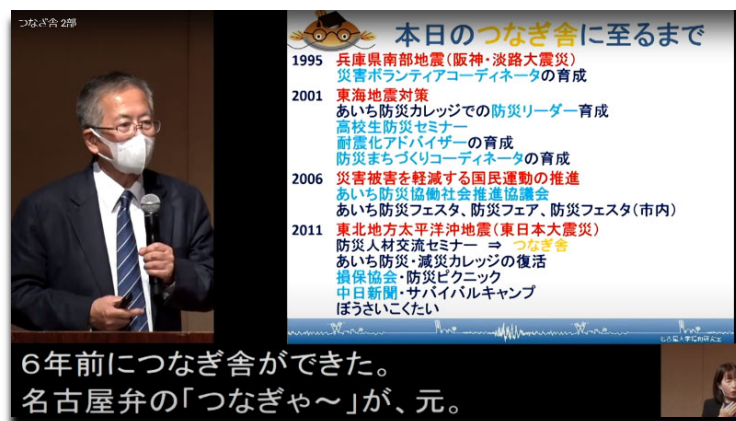
○ 開会

主催者を代表して、愛知県防災安全局長の坂田一 亮 防災安全局長が挨拶を行いました。



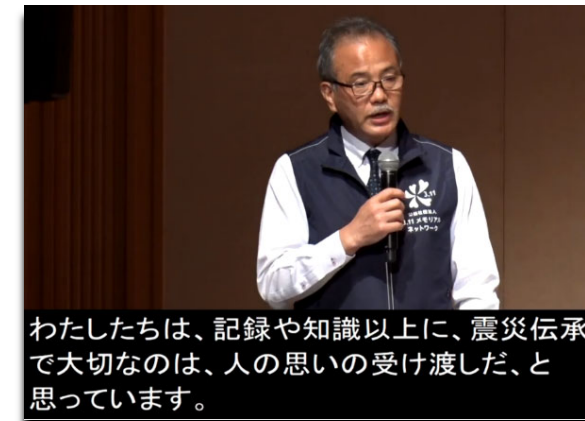
○ 開催趣旨

あいち・なごや強靱化共創センター長の名古屋大学 福和伸夫 名誉教授からは、つなぎ舎の立上背景や語源、皆がつながることの大切さを説明され、今年のスローガン「東北から愛知へ 愛知から未来へ」について、次の被災者である私たちは、東北から学びを受けて、愛知の若者の未来を明るくするために皆で一緒に考えよう！とメッセージが送られました。



○ 【第2部】東北の震災伝承活動の現状

3. 11メモリアルネットワークの武田真一 代表は、伝承活動という形で東日本大震災の教訓と知見を伝え続けられています。そうした中、伝承活動にも様々な形があり、今回は「講演」や「講話」では伝えきれない想いを、3つの形（岩手：甚句、宮城：オンライン語り部、福島：朗読劇）で、愛知の私たちに届けてくださることを説明いただきました。



東日本大震災の伝承を通じて
 災害でいのちが失われない社会
 被災の苦難を軽減し再生に向かえる社会
 の実現に貢献します

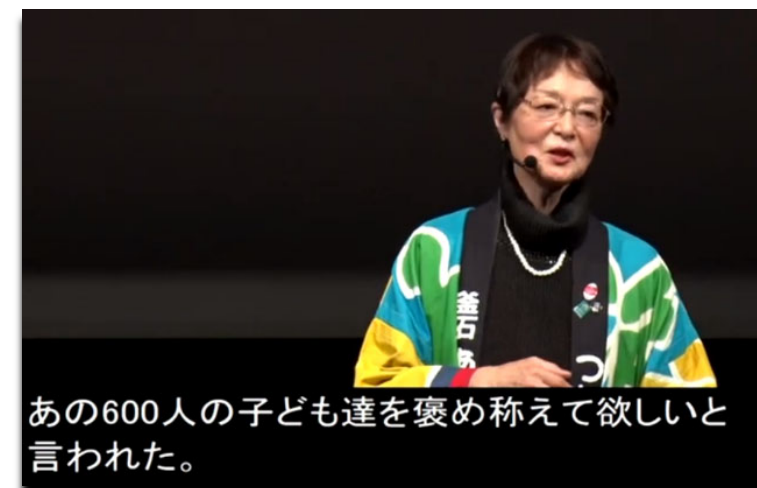
- ✓ 岩手・宮城・福島の草の根連携組織
- ✓ 全国に約750のメンバー(約680名+80団体)
- ✓ 2022年10月1日 公益法人として体制強化

わたしたちは、記録や知識以上に、震災伝承で大切なのは、人の思いの受け渡しだ、と思っています。

3. 11の体験と教訓を未来へ

【その1 岩手県】津波甚句 釜石あの日あの時甚句つたえ隊

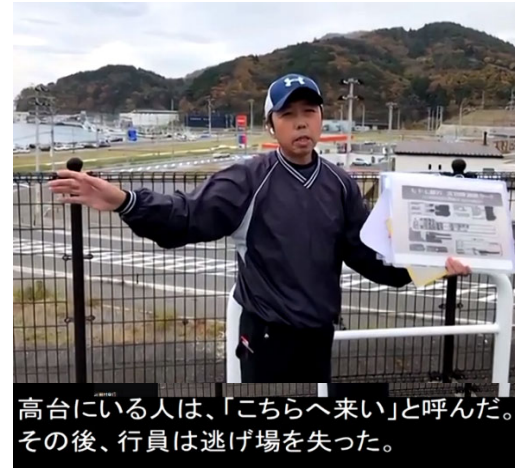
デュオ活動の唄い手の藤原マチ子さんと、口上・合いの手担当の北村弘子さんは、「釜石の奇跡」と呼ばれた子供たちを褒め称える唄をつくらうとしたことから、甚句を始められました。被災経験を唄われた甚句をご披露いただき、会場では涙する来場者も見られました。



あの600人の子ども達を褒め称えて欲しいと言われた。

【その2 宮城県】 オンライン語り部 健太いのちの教室

田村孝行さん・弘美さんのご息子の健太さんは、宮城県女川町で勤務中に津波で犠牲となりました。健太さんの命から多くの事を学ばれた田村さんご夫妻は、企業・組織の防災減災では、勤務先が従業員の命を守ることができるかどうかが大変な視点ということ、これから就職を控える愛知の学生（若者）の皆さんに、メッセージとして届けてくださいました。



【その3 福島県】 声と手話による朗読劇

生きている 生きてゆく～ビックパレットふくしま避難所記より～

福島県は、津波被害だけでなく、原発事故という複合災害が、今も現在進行形の状況です。富岡町 3.11 を語る会の青木淑子 代表は、実際の出来事として、障害をもつ方々が、様々な情報を取り入れられなくて、思うに避難することができなかったという事実から、ろうあ者の手話言語と、健常者の音声言語と一緒に表現し、朗読劇という形での伝承活動をされており、今回、特別バージョンを愛知でご披露いただきました。



○ 【第3部】 パネルディスカッション / グループワーク

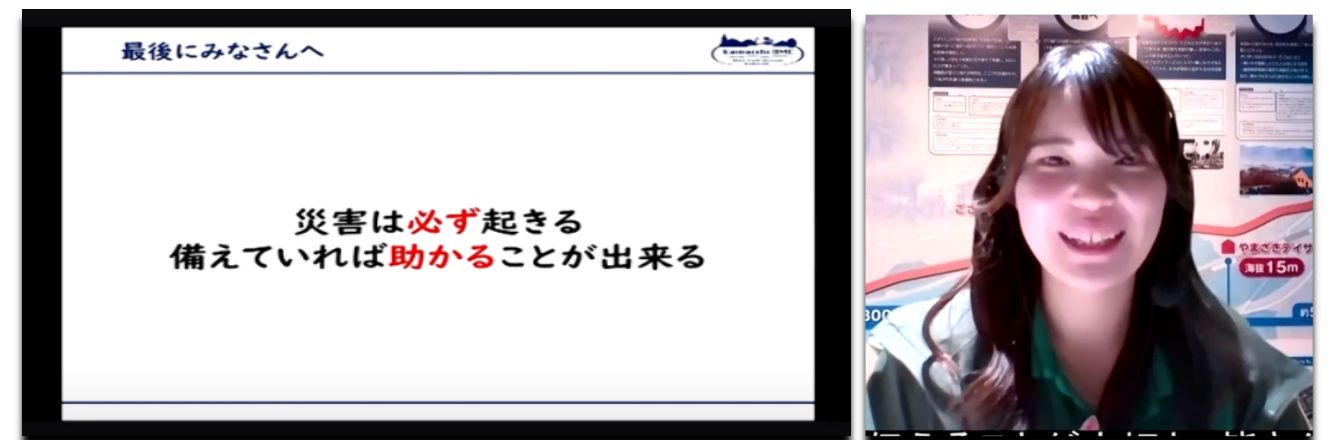
第3部は、来場者が2つのセッションに分かれる形で進行了しました。メインホールでは、「パネルディスカッション」、サブホールでは、「グループワーク」を開催し、第1部・第2部での東北からの学びを受けて、来場者同士の意見交換が行われました。

【パネルディスカッション】

認定NPO法人レスキューストックヤードの栗田暢之 代表理事が進行を務めました。



かまいしDMCいのちをつなぐ未来館の川崎杏樹さんは、オンラインでご参加いただきました。川崎さんは、当時中学2年生で、後に「釜石の奇跡（釜石の出来事と呼ぶようにしている）」と継がれる当時の出来事についてお話をいただき、初めて死ぬかもしれないと感じた心境やそれでも備えていれば助かることができるという、釜石の防災学習をお話いただき、愛知の皆さんも、いつ起こるか分からない災害だからこそ、備えるのは「今」とお話をいただきました。



名古屋大学2年の岩倉侑さんは、小学2年の時に宮城県石巻で被災されました。大学進学を契機に愛知に移り住み、現在は学業の傍ら、語り部活動を続けられていることをお話いただきました。語り部活動を通じて感じるものとして、震災伝承が愛知では広まっていないことを懸念しており、これからの災害に備えるためには伝承者が愛知にすることが大事で、伝承者は被災経験者だけではなく、被災経験者ではない人でも伝承者になれる！と力強くメッセージをいただくとともに、僕に語り部の「場」を与えてほしいと、とても頼もしいお言葉をいただきました。

名古屋の「これから」について

これらを同時に全て解決する手段

伝承者が名古屋にいる

- ・震災経験者に「語り部デビュー」してほしい
- ・高校生や大学生に周りに「広めて」ほしい

➡ 最も多くの世代に話を聞いてもらいたい

被災されました3人の若者のお話を受けて、福和先生からは、人との接点を大事にされていることが皆の共通点で、且つ故郷を一旦離れたことで、地域の温度差を感じ、自分がやらなければならないというスイッチが入った点は、新たな人材を発見したり掘り起こす点でのポイントになるかもしれないとお話いただき、武田先生からは、故郷のために力になりたいと3人とも力強く宣言してくれたことが頼もしく、また震災から10年が経過し、被災経験を一緒に語り合ってもよいと考え始めた人も多くなってきたことを説明いただいた上で、今日お集まりの皆さん自身も、東北の事実・想いに触れた伝承者であり、そうした伝承の広がり強く望んでいることについてお話いただきました。



愛知淑徳大学1年の佐藤ららさんは、小学1年の時に福島県で被災されました。その後、愛知県へ広域避難をされましたが、しばらくは不安な気持ちが続き、震災のことを話すことが、ほぼ無かったとお話いただきました。そうした中、震災のことや自分の経験話を受け止めてくれる友達に出会えたことがきっかけで、少しずつ、話をしてみようという気持ちになり、今では、福島のために自分ができることがあれば関わっていきたいことや、当時の状況を多くの人に知ってもらいたいと思えるようになったことを、力強くコメントをいただきました。

今後起こるかもしれない災害のために

- ・いつ起こるかわからないからこそ、持ち出しバッグなどの準備をしっかりとしておく
- ・災害が起こったらどうするか日ごろから話しておく
(避難場所、経路、方法、家族との連絡手段などについて)
- ・近所の方とのつながりづくり
- ・正しい情報を得ること
- ・災害時ボランティアについて
- ・どのようなことが起きていたのか、今どのようなになっているのか知ってほしい

○ 【第3部】グループワーク

災害ボランティアコーディネーターなごや 椿佳代さんが進行を務めました。サブホール会場では、Zoomも含めて8班に分かれ、「東北からの学びを受けて、何を感じ、何をすべきか、それを私たちの活動（行動）にどのようにつなげていくか」について、各グループで意見交換を行いました。

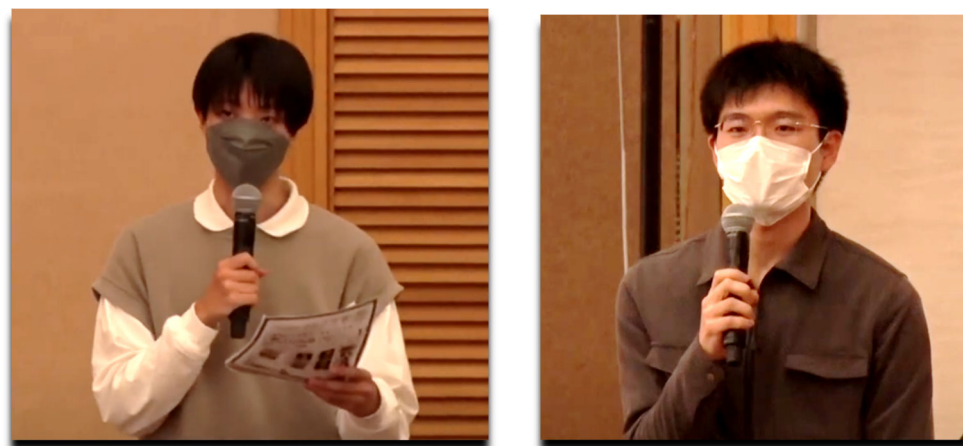


意見交換の内容は、グループの代表者から、メインホールで発表いただきました。発表者は、大学生が自発的且つ積極的に務めていただきました。

至学館大学の大林佑弥さんからは、防災への関心を多くの人に広めるために、学校とボランティア団体が連携し、防災イベントを立案していきたいと発表いただきました。名古屋大学の坂上野々香さんからは、人間のたくましさや、力強さ、命の大切さについて、震災からプラスのを感じとれたので、生きることについてもっと考えていきたい。そして、同世代に少しでも伝えていきたいと力強くコメントをいただきました。



日本福祉大学の鈴木健生さんからは、初めて防災の事をしっかり学び大変な刺激を受けたことについて、自分のような人間をもっと増やさないといけないと感じたことと、だからこそ伝えることを無くしてはいけないとお話いただきました。名古屋大学の成澤恒星さんからは、学生の中には、防災に興味がない人があまりにも多いと感じており、説教くさく伝えるのではなく、体験談を伝える場、議論できる場を活用して、学生の中にも伝え広めていきたいと力強くコメントをいただきました。



名古屋大学の桂川陽佳さんからは、正常性バイアスを崩さないといけない。余計なお世話だと言われてもしつこく伝えていかなければいけないとお話いただき、至学館大学の杉浦亮介さんからは、人とのつながりを大切にする事で、助け合う心を育み、誰一人取り残さない防災につなげていきたいと力強くコメントをいただきました。



各グループの発表を受けて、武田先生からは、防災に無関心な人へのアプローチは難しく、答えがあるわけではないが、災害やウクライナの戦争のような残酷な亡くなり方は、人間の尊厳ではない中で、災害の場合は自分たちで対策できることが多い。“人間の尊厳を守る・尊重する社会をつくる、”ということ呼びかけ続けることが大事なので、皆で頑張っていきましょう！とまとめていただきました。

福和先生からは、3年前から、参加する若者が少しずつ増えてきて、今日の発表が全員若者であったことは3年間の進化であり、そして、その頑張っている若者を、ちゃんと周囲が支えているという雰囲気があったことも大変うれしいことで、引き続き良い形で、学び備えていくために、私達登壇者も若者や皆さんに負けないように頑張る！力強く宣言されて、パネルディスカッションとグループワークを締めくくられました。

コーディネーター役の栗田代表理事は、登壇者と来場者が同じ空気感でいれるように、終始和やかな場づくりに努めつつ、登壇者の主張をしっかりと理解した上で、どのような論点でディスカッションを進行していくか、瞬時に方向性を決め、シンポジウムを楽しく、そして分かりやすく、コーディネートしていただきました。



○ 閉会

共催者を代表して、一般社団法人日本損害保険協会中部支部の三村雅彦 事務局長より挨拶をいただきました。



一般社団法人日本損害保険協会中部支部事務局長
三村 雅彦

○ 配付資料

- ・ 2022 年度つなぎ舎チラシ
 - ・ 3.11 メモリアルネットワークパンフレット
 - ・ 3.11 メモリアルネットワーク基金ご寄付のお願い
 - ・ 3.11 メモリアルネットワークチラシ
 - ・ 宮城女川語り継ぐ命リーフレット
 - ・ 語り人通信 36 号
 - ・ ノベルティ (軍手またはクリアファイルのどちらか一つ)
 - ・ あいち・なごや強靱化共創センター手提げ袋
 - ・ あいち・なごや強靱化共創センター支援のお願いチラシ
 - ・ あいち・なごや強靱化共創センターパンフレット
 - ・ あいち防災フェスタチラシ
 - ・ 家具固定の呼びかけチラシ
 - ・ 第 33 回特別企画展 (まちづくりと都市火災)
- 【実行委員会】
 - 【3.11MN】
 - 【3.11MN】
 - 【3.11MN】
 - 【健太いのちの教室】
 - 【NPO 法人富岡町 3.11 を語る会】
 - 【損保協会】
 - 【共創センター】
 - 【共創センター】
 - 【共創センター】
 - 【愛知県】
 - 【愛知県】
 - 【名古屋大学減災館】

○ 新聞記事 (中日新聞社)

東日本大震災の経験をつなぎ、南海トラフ地震などの大規模災害に備えるため、地域、世代を超えて話し合います。

13日前10時後5分東浦町のあいち健康プラザホール。先着200人。参加無料。会場参加は事前申し込み不要

内容 (一部) 震災記録映画「たゆたえども沈まず」の上映 (2部) 津波甚句、語り部の話、朗読劇で震災の体験と教訓を伝える (3部) 東日本大震災からの学びを受け、地域の活動や未来にどうつながっていくかをグループで話し合う▽討論者「あいち・なごや強靱化共創センター」長福和伸夫さん、共創センター長福和伸夫さん、3・11メモリアルネットワーク代表理事武田真一さん、いのちをつなぐ未来館の川崎杏樹さんほかオンライン配信システム「Zoom (ズーム)」で視聴可。事前申し込みが必要で締め切りは9日。詳細は「つなぎ舎」で検索

主催 防災人材交流シンポジウム実行委員会
 共催 3・11メモリアルネットワーク、日本損害保険協会中部支部

中日新聞社

朝刊 11/5 (土) 県内版

東日本大震災の教訓を未来につなぎ、南海トラフ巨大地震に備える防災人材交流シンポジウム「つなぎ舎」(中日新聞社など共催)が13日、東浦町のあいち健康の森公園あいち健康プラザで開かれる。

第一部は東日本大震災の記録映画「たゆたえども沈まず」を上映。第二部では、震災の体験を唄い、語り部が語り合う。

参加費無料で、事前申し込み不要。会場聴講の定員は200人。第二部と三部はオンライン配信(9日までの事前申し込み)。詳細は「つなぎ舎」で検索。防災人材交流シンポジウム事務局 052(747)6979 (横井武昭)

東日本大震災の教訓を未来につなぎ、南海トラフ巨大地震に備える防災人材交流シンポジウム「つなぎ舎」(中日新聞社など共催)が13日、東浦町のあいち健康の森公園あいち健康プラザで開かれる。

第一部は東日本大震災の記録映画「たゆたえども沈まず」を上映。第二部では、震災の体験を唄い、語り部が語り合う。

参加費無料で、事前申し込み不要。会場聴講の定員は200人。第二部と三部はオンライン配信(9日までの事前申し込み)。詳細は「つなぎ舎」で検索。防災人材交流シンポジウム事務局 052(747)6979 (横井武昭)

朝刊 11/7 (月) 県内版

東日本大震災の経験をつなぎ、南海トラフ巨大地震に備える防災人材交流シンポジウム「つなぎ舎」(中日新聞社など共催)が13日、東浦町のあいち健康プラザで開かれた。防災や伝承活動に取組む東北と東海地方の団体、語り部らが集まり、将来の大規模災害に教訓をどう活かすかを考えた。

「東北から愛知へ、愛知から未来へ」をテーマに、パネル討論では被災経験を語り継ぐ者が登壇した。宮城県石巻市出身の名古屋大学二年、岩倉侑さん(左)は小規模生活を送ったと説明。南海トラフ巨大地震が懸念される愛知県で語り部をするために同大に進学したというかもしれない地域の人は健康プラザホールで開かれた。防災や伝承活動に取組む東北と東海地方の団体、語り部らが集まり、将来の大規模災害に教訓をどう活かすかを考えた。

「東北から愛知へ、愛知から未来へ」をテーマに、パネル討論では被災経験を語り継ぐ者が登壇した。宮城県石巻市出身の名古屋大学二年、岩倉侑さん(左)は小規模生活を送ったと説明。南海トラフ巨大地震が懸念される愛知県で語り部をするために同大に進学したというかもしれない地域の人は健康プラザホールで開かれた。防災や伝承活動に取組む東北と東海地方の団体、語り部らが集まり、将来の大規模災害に教訓をどう活かすかを考えた。

朝刊 11/15 (火) 県内総合

9 事業の効果

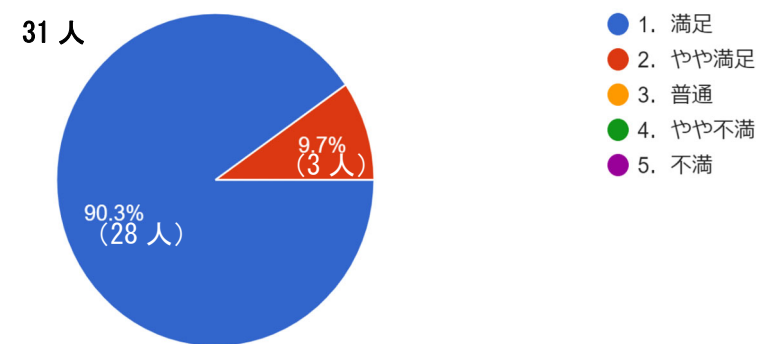
参加者へのアンケート結果では、「満足」・「やや満足」の回答割合が、第1部・2部・3部の全ての区分で、94%を超える高評価でした。

また、「被災者の想いが心に響いた」と多くの参加者が回答しており、実際にグループワークやパネルディスカッションでは、あらゆる世代の参加者が、積極的に発言や意見交換を行う等、災害を我が事として捉えている様子をうかがうことが出来ました。

10 参加者アンケート結果

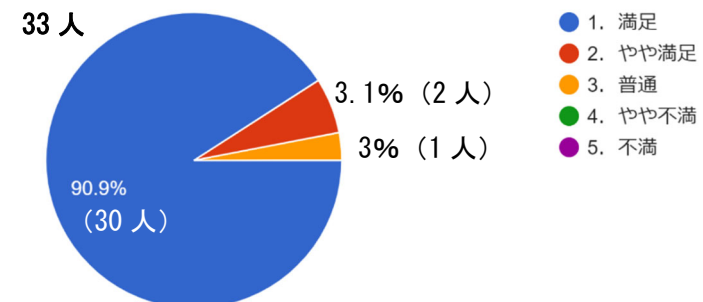
10-1) 第1部 映画上映会について

■満足度について



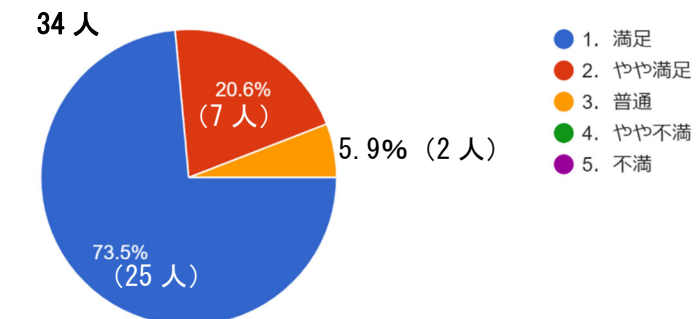
10-2) 第2部 3.11の体験と教訓を未来へについて

■満足度について



10-3) 第3部 パネルディスカッション/グループワーク

■満足度について



以上